生涯学習情報誌
Life Learning

5 2016 May. NO.309

生涯学習開発財団

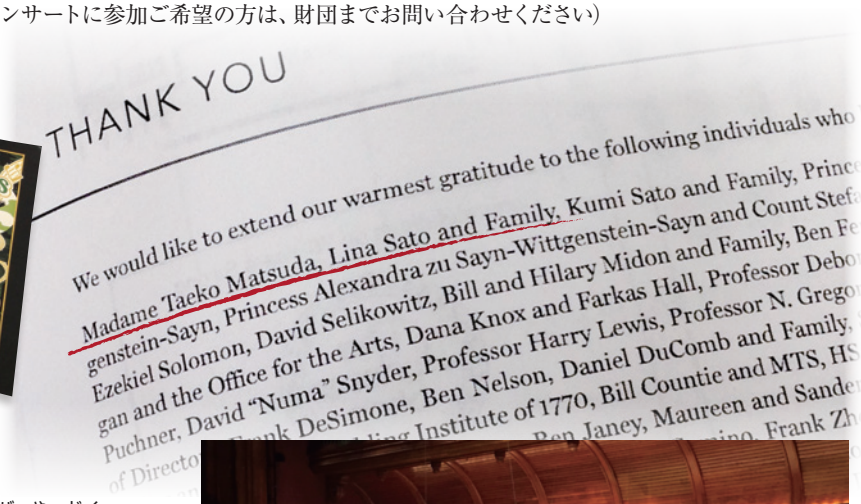
クロコディロス 70周年記念イベント

The HARVARD KROKODILOES 70th Anniversary

参加レポート

2016年3月4日／レポーター：佐藤梨奈

生涯学習開発財団では長年に渡り、国際文化交流事業の一つとして、
ハーバード大学の男声ア・カペラコーラスグループ〈クロコディロス〉の日本公演を開催してきました。
クロコディロスはハーバード大学で最も歴史がある1946年設立。
今年は70周年で、名誉会員として記念イベントに招かれ、取材を兼ねて参加しました。
レナード・バーンスタインが「奇跡のハーモニー」と賛えた実力を代々引き継ぎ、毎年夏に世界ツアーを行います。
今年は2年ぶりに日本公演が行われ、6/17〜27まで、東京と熊本県の各地でコンサートと交流をします。
（お近くで開催されるコンサートに参加ご希望の方は、財団までお問い合わせください）



↑→記念イベントの招待状、チケット、パンフレット。パンフレットの謝辞のページには最初に松田妙子と佐藤梨奈の名前が。

←↓かつて来日したメンバーや、ドイツのパトロンであるプリンセス・アレクサンドラファミリーらとも交流。

70周年記念コンサートでは、1960年代〜2010年代まで各世代のOBたちがステージでコーラスを披露。最後は100数十名のクロコディロスが勢揃い。

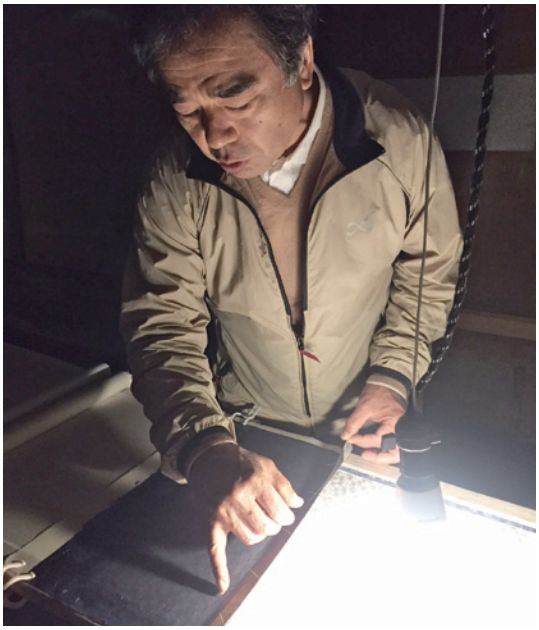
←↑レセプション会場でもあちこちがステージになった。

↓来日予定の2016メンバー12名（Webサイトより）。

2016クロコディロス日本公演（予定）

6月17日	来日
6月19日	倶楽部グリーとジョイントコンサート
6月20日	コーチ・エイ社内コンサート
6月21日	日本ハーバード・クラブ
6月24〜26日	熊本県各地で公演と交流
6月27日	離日

技術だけでなく良いものを作ろうとする姿勢を伝承



染織（江戸小紋）

小宮康正

Komiya Yasumasa

1956年　東京葛飾区にて重要無形文化財保持者・小宮康孝の長男として生まれる
1972年　父のもとで修業を始める
1980年　第27回日本伝統工芸展初入選
1983年　第30回日本伝統工芸展にて文部大臣賞 受賞
1988年　突彫小紋 着尺両面染「立霞入り連子」文化庁買い上げ
1989年　東京国立近代美術館「ゆかたよみがえる」展出品
1990年　日本伝統工芸展10周年記念特別ポーラ奨励賞 受賞
1994年　第７回MOA岡田茂吉賞 優秀賞 受賞
2006年　第53回日本伝統工芸展にて高松宮記念賞 受賞
2007年　第54回日本伝統工芸展鑑審査委員
2010年　紫綬褒章受章

江戸小紋は、江戸時代の大名たちが競って裃（かみしも）に小紋を入れたことから発展し、粋と品を感じる風合いが今も愛用されている。パターンの元となる型紙づくりと、正確に生地に糊を乗せていく作業は高度な職人技だ。祖父の小宮康助氏が創業し、１００年の歴史がある小宮染色工場の三代目・小宮康正氏。祖父から父・康孝氏、そして康正氏へとつながれたのは、匠の技だけでなく改良の精神だった。江戸小紋のクオリティをさらに高め、現在、２人の息子、康義氏と康平氏にも継承されている。「江戸小紋」の呼称は、１９５５年に康助氏が重要無形文化財保持者（人間国宝）に認定される際に、他の小紋染と区別するために採用されたもの。

――高度な伝統技術を一家で継承されておられますが、いつごろから後を継ごうと思われましたか。

いつというか、ほとんど洗脳ですね。祖父は「孫は俺が仕込む」と言っていたそうですが、歌舞伎などと同じで、良さがわかってから入っても手遅れな世界なんですよ。だから子供に見て覚えさせるんです。今なら職人技もだんだん解明されてきたので、大学くらいから理論的に教え始めても、技術の継承は可能でしょう。

それより、いくら伝統技術と言っても用途がなくなったら滅びちゃうんですよ。祖父は、どんなに良くても古い型紙は買わなかったそうです。「その金で新しい型を買え」と言って、型紙職人の仕事や技術が後世に残ることを重視したんです。そうやって祖父が残した大量の型紙を、父はほとんど使っていません。祖父の精神を受け継いだからこそ、さらに型紙の品質を高めたからです。

業界全体のレベルを上げながら残すことが小宮を守ることになるという、うちの家訓みたいなものです。

――小宮さんもかなり糊の研究をされたそうですね。

紋様の繊細さやキレの良さを染め上がりに反映させるには、防染糊が型通りに生地に置かれ、しかも取れない粘り気が必要です。それによって滲みやムラのないシャープな染際が出るのです。糊は糠（ぬか）と糯（もち）米の粉をペースト状にしたものに、防染のための活性炭や染まらない顔料などを混ぜて作ります。でんぷん質によって水切れや粘り気を調節し、紋様に適した糊にします。材料の質、染める生地、その日の気候などによっても変えます。

糠の製粉業者が廃業するピンチもありました。でも自社でやってみると、原料を吟味したり、練る機械を変えたり、絵柄によって配合を変えてみたりと、手間はかかりましたが品質はむしろ良くなったんですね。この世界は分業によって支えられています。型紙を作るための和紙、型彫りに使う刃物、染める前の生地、染料など、関連する素材や道具がたくさんあります。そのどれがなくなっても大変ですが、それを機により良くする工夫が生まれることもあるわけです。

――この板場にも様々な工夫があるそうですね。

はい。建物の窓は南側だけです。長板を乗せる馬は、南側が低く奥に行くほど高くなっています。この傾斜により、南からだけの光を長板の面に当てます。型紙で糊を置いていく型付けという作業を繰り返す際に、正確に絵柄を合わせるためです。床は土間にして湿度を高く保つことで、型紙や防染糊の乾燥を防いでいます。

――今日はなぜ窓を閉めているのですか。

実はこれも改良の一つで、繊細な仕事をするときは、窓を閉めて電球1灯の光で型付けをしています。湿度を一定に保ち糊のムラを出さないためです。蛍光灯ではムラが見えないため、白熱電球の製造中止でまたピンチでしたがLED電球は使えたんです。型付けの後に染料の入った糊でしごき、蒸し箱に入れて90℃で1時間程蒸します。蒸しにも躊躇しながらボイラーを導入しましたが、微調整できる利点があり活用しています。

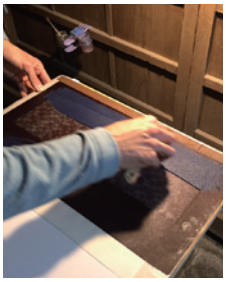
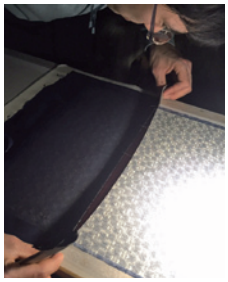
先代から引き継いだ技術をそのまま続けることではなく、今使われて「良いなあ」と思われるものを作り続ける姿勢こそが、伝統の継承だと思うんです。そもそも江戸小紋は、明治43年に、蒸して絹の非結晶領域に染料を閉じ込めるという大きな変革をしたから、色落ちしにくい着物として生き残ったんです。

――親から子へ着物を着つなぐのにも適してますね。

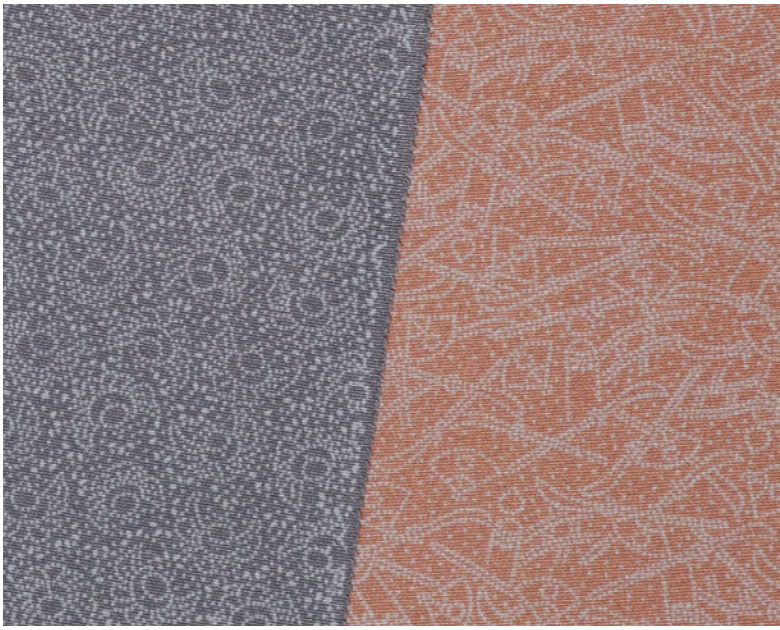
実はそれをかなり意識して、うちの小紋は生地のままの色ではなく、薄っすらグレーにする着色防染をしています。なぜかと言うと、絹は長年タンスで寝かせると生地が少し黄変するのですが、グレーが入っているとそれが目立たず、常に新鮮に見えます。技術的には型付け糊の調合で工夫しています。着物は究極のエコですし、ぜひ親から子へつないでいってほしいです。

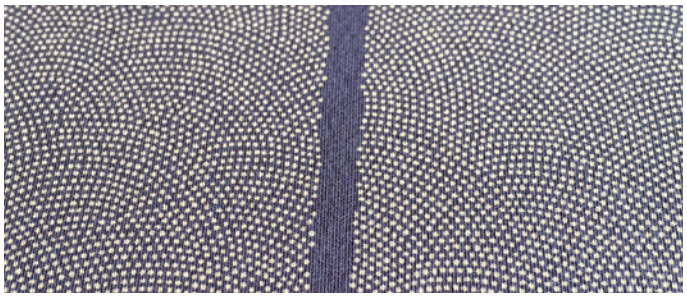
――伝統技術の継承とも似ていますね。

そうです。私は、祖父、父から受け継いだ良い技を守りながら、未来を作っていく思いでやってきました。伝統は受け継ぐよりも、伝えることの方が難しいです。伝統技術とは言いますが、息子たちには、気持ちはいつも最先端のつもりで取り組んでもらいたいです。

息子の康義氏が型付けの一部を実演してくれた。繊細な作業を素早く行う。





定番の鮫小紋でも、型紙職人によって仕上がりに差が出る。

聞き手：上野由美子（右）

古代オリエントガラス研究家。UCL（ユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドン）考古学研究所在籍中。2012年国際日本伝統工芸振興会の評議員。ARTP副団長として王家の谷発掘プロジェクトに参加（1999年～2002年）。聖心女子大学卒業論文『ペルシアガラスにおける円形切子装飾に関する考察』、修士論文『紀元前2000年紀に於けるコア・ガラス容器製作の線紋装飾に関する考察』ほか、執筆・著書多数。

特設トークショー

多元的共生社会における日本文化を考える ▼2016年3月15日 生涯学習開発財団にて

「実践して楽しんで、その先に感じるのが文化」

Nishiura Style● 西浦喜八郎さんを囲んで

聞き手● 苅宿俊文（青山学院大学社会情報学部教授）

苅宿　今日は楽しみにしていました。なぜなら西浦さんは、自分にはない何かを持ってる人だと感じているからです。Nishiura Styleという、お茶、お香、お花、書などの日本文化を楽しむ暮らし方を提唱・実践されている一方、全く無関係に思える地球物理学者でもあります。まずは、その辺の経緯をお聞きかせください。

西浦　西浦家は西浦焼の窯元としてだけでなく、商社として、明治期に財閥的発展をしました。戦争の影響で解体されましたが、家では美術品や骨董に囲まれていたわけです。私の父は美術品市場を営みつつ、私を週3日も美術館に連れ回し、「この作品は良い。これは悪いから見るな」と言うだけで、私が「何で?」と質問しようものなら、「そんな質問をすること自体がダメだ」と怒りました。そんな感じで、アートに囲まれた子供時代を過ごし、確かに目は養われましたが、私の中ではアートは嫌なものになってしまったのです。アートから逃げる意味もあって、地球物理学を学ぼうとアメリカに渡ったのです。

苅宿　そこからなぜ、またアート的な生き方に戻ってこられたのですか?

西浦　アメリカに渡って、友人がくれた絵葉書の月光菩薩像を眺めていた時、「この菩薩は1000年もの間、暗い中にいる時も、老若男女いかなる人に対しても微笑みを与えて続けているんだ。自分でアメリカに来ると決めたのに寂しいなどと思ってはダメだな～」と感じた途端に涙があふれました。菩薩を作った人の孤独と寂しさを感じました。そして前へ進む気持ちを喚起してくれました。その時に「アートはこういう力も持つんだ。我が家のアートに携わる道も悪くない」と感じたのです。

1970年生まれ。西浦焼を国内外に広めた西浦圓治の子孫で、古美術商·西浦淥水堂の4代目。オハイオ大学院地球物理学修士課程終了。茶、香、花、書などを楽しむNishiura Styleファンが国内外に増加中。

苅宿　日本文化を教えるきっかけは?

西浦　お付き合いのあった花屋さんから「子供にお花を教えて」と頼まれたのが始まりですが、その後は自然な流れで、お茶やお香や書にも広がっていきました。うちは「道」をつけていませんので、流派を越えて親も参加できるんです。そのうち、児童館、百貨店、お寺、NPOなどから「うちでも教えてほしい」と言ってくださり、「アメリカにも来てほしい」と。大きな流派は決まり事が多く、素人がすぐ楽しめる段階にはいかないです。うちは実践あるのみで、子供も外国人も楽しめるのです。

苅宿　みんな流れで向こうからやって来てます。他力本願ではないですけど、目の前に現れることを受け止め受容する力。結果的にそれが人に役立つ形で表れるんだろうと感じますが、そういう生き方をするコツみたいなものはあるのですか?

西浦　アメリカで地震の研究をしていた時、大地に寝っころがって、鳥や木や風など自然の動きを観察しました。自然と一体になることで見えるものがあるからなんです。スマトラ沖大地震の津波で人間は何万人も逃げ遅れて亡くなったけど、象は高台に逃げて生き延びました。自然の一部になることで磨かれる感覚とかアンテナのようなものはあるかもしれませんね。

苅宿　生涯学習開発財団は、西浦さんが国際交流の中で実践的、ラボ的に日本文化を伝える意義を評価し、2015年度の助成金を授与しました。異文化交流において心がけている点はありますか?

西浦　相手がどこの国の人かは意識しません。異なる点よりも、例えば月を見て美しいと感じる共通点を重視します。子供に教えていると、彼らは正直ですから、つまらないとかわからないとかすぐ態度に出ます。この子たちに楽しんでもらうことができれば、もう誰とでもコミュニケーションがとれると感じながらやっています。

苅宿　私たちは、目的を持って効率良く生きることに囚われがちです。西浦さんはそれとは対照的な生き方をしていると感じました。多くの方の生きるヒントになったのではないでしょうか。

西浦　ありがとうございました。